

「資料紹介」

吉國恒雄著 グレートジンバブウェ
—東南アフリカの歴史世界 講談社
現代新書 1999年 212p.



新書の理想のような本である。深い学識にしっかりと裏打ちされた流麗で平易な文体が、日本では恐らくこの著者以外分け入ったことのない学問世界へと導いてくれる。学者の個性とはこういうものだと教えてくれているようだ。吉國氏はジンバブウェ大学の故ピーチ教授のもとで永く研鑽を重ねたアフリカ史学者で、現在は専修大学で教鞭をとっている。昨年ジンバブウェのWeaver Pressから共編著*Sites of Struggle*を出版し、植民地期都市研究の分野で地歩を固めている。これまでアフリカ史に関する本は歴史学者以外の手になるものがほとんどであったが、日本のアフリカ研究における歴史学の位置取りが、本書によってより鮮明になったのではなかろうか。

本書の秀眉は、世界文化遺産にしてアフリカ孤高の巨大遺跡であるグレートジンバブウェが、どのようにして、またいかなる意味を携えてこの地に出現したかという謎を解いていくところにあるが、読者を刮目せしめるのは、その作業によってグレートジンバブウェが、「東南アフリカ」千年紀に亘る悠遠な歴史世界のなかに、いかにも自然な精華として収まっていくという、碩学ならではの手腕である。歴史学にしかなできない、地域固有の盛衰の不思議とダイナミズムを描き出すという仕事が、ここにひとつの完成をみている。東南アフリカというこれまであまり聞き慣れなかった地域観が、このドラマにとってリアリティのある歴史空間であることをよく納得させてくれる。ショナ広域文化は、近代ヨーロッパの蹂躪と出会うはるか以前に、すでに“後退”の様相を示していた。本書は、わずかに100年のヨーロッパ植民地支配を、より遠大な地域固有史のなかに収めて見事に相対化してくれる。

(平野克己)

パコ・イグナシオ・タイボII他著
神崎・太田訳 ゲバラ コンゴ戦記
1965 東京 現代企画室 1999年
372p.



本書は、革命支援のため1965年4～11月にコンゴ（旧ザイール）東部に潜入したキューバ人革命家チェ・ゲバラの足取りを追ったドキュメンタリーである。彼自身が残した記録と関係者の証言によって構成され、1997年にメキシコで出版されている。アフリカに関わる者にとって、実に面白く、教訓的な本だ。スペイン語で書かれたこの本を日本語で読む機会を与えてくれた翻訳者の熱意と出版社の度量に敬意を表したい。

革命というすぐれて近代的な営為を遂行しようとする人間が、アフリカで何を思うか。本書で示されるゲバラの言葉の端々にその矛盾と葛藤が描かれている。彼は「これほどの孤独感をおぼえたことは初めてだ」と記さざるを得なかった。戦いをともにした人民解放軍は「怠惰」で「寄生虫のようなもの」であり、弾丸に当たっても死なないという「迷信」を信じ込んでいる。指導者のカビラ（現大統領）は、「単に多弁」で「嘘のある人物」であり、ゲバラが指導のために奮闘している前線に、来る、来ると言いながらさっぱり現れず、ようやくやって来たと思えば調子のいいことを言ってすぐ都会に引き返してしまう。残された兵隊たちはカビラが戻るまで戦わないと駄々をこねる……。

これは、アフリカにおける革命家の孤独を描いた物語である。これはまた、アフリカを改革しようと善意を抱いて指導にやってきた外国人の挫折物語でもある。ゲバラがアフリカ人に対して示す激しいいらだちを、アフリカ社会への無理解から生じる近代主義者の傲慢と批判することは容易い。しかし、彼のいらだちは、われわれ自身が時にアフリカで抱く感情とどこか似通っている。考えてみれば、彼の立場とわれわれアフリカに関わる日本人の立場は、それほど隔たっているわけではないのだ。時々こんな本を読んで頭を冷やすことが必要かも知れない。

(武内進一)

岡安直比著 子育てはゴリラの森
で 東京 小学館 1999年
277p.



最初から最後まで息もつかせぬ娯楽映画をジェットコースター・ムービーというが、これはまさに「ジェットコースター本」である。本書を貫く縦糸はコンゴでの内戦勃発。娘さんだけを国外に逃がし、略奪の続くコンゴにゴリラとともに残った著者。はたして二人は再会できるのか？ 結末を知りたくて勢いよく読み進むうちに、マラリアのこと、人々の暮らしのこと、インフレのこと、ゴリラ保護のことなど中部熱帯アフリカのさまざまな事情が紹介される。縦糸をいりどるそれら横糸は豊かで多彩、織り込んでいく技術もまた一級品である。

本書の中心が、題名から想像されるほど「子育て」に傾いていないのもおもしろい。小学生になったばかりの娘さんを連れて、(言葉を選ばずにいうなら) 猖獗きわまる熱帯雨林に移住したにもかかわらず、この新進気鋭の霊長類研究家は、いつも自分の戦い——アフリカでゴリラの研究をすること——に従事しているように見える。そして、娘さんは本書の中ではむしろ小さな「戦友」のように描かれるのである。

子育てやゴリラの保護についてだけでなく、女性として生きるということ、研究するということが、アフリカで暮らす人々のこと、内戦と環境保護の問題など、一冊の本とは思えないほどにさまざまなメッセージが伝わってくる。「縦糸」の結末が知りたい方はもちろん、アフリカに住み慣れているらっしゃるようなベテランの方々にもぜひお勧めしたい一冊である。

(津田みわ)

栗本英世・井野瀬久美恵編 植民地経験——人類学と歴史学からのアプローチ—— 京都 人文書院 1999年 392p.



本書の意図は、編者による優れた序論に明確に示されている。植民地のマクロな政治経済的システムではなく、植民地という舞台で展開したミクロな「生きられた植民地経験」を描き出すこと。その出発点として、支配する側とされる側とがそれぞれ一枚岩ではないという認識をおき、植民地という場で出会う多様なアクターの相互作用のダイナミズムを、相互作用が行なわれる場を構成する権力関係を前提としつつ明らかにすること。そのうえで、個別の多様な植民地経験が全体に対してもつ意味を読み解くこと。これらの課題に、人類学と歴史学の共同作業を通じて取り組んだのが本書である。

人類学と歴史学が、ともにいわゆる「ポストコロニアル」批評によって激しい攻撃にさらされてきたのは周知のとおりである。これらの学問の発展が植民地主義や帝国主義と深く結びついたものであることはよく知られているし、「他者」について「書く」ことの権力性、また、そもそも「他者」は表象可能なのかといった根本的な問題提起のなかで、存在意義を問われさえした。しかし、人類学と歴史学はそれぞれ真摯な自己反省を経て、そしてその過程で相互に出会うことによって、すでに自信を取り戻し、次に進むべき方向を見いだしたようである。本書の随所に、その力強い確信が見られる。

アフリカとアジアにまたがる12の各論においては、上からと下からの歴史認識のズレ、仲介者や協力者の役割など、いくつかの興味深いテーマが繰り返し現れる。また、「ポストコロニアル」批評の再検討と位置づけうる、文化表象の問題を扱った2本の論文もあわせて収録されている。

(牧野久美子)